探求・川にちなんだ万葉集の歌

第52回

## 万葉の川心

横浜市立羽沢小学校教諭 澤井 園子

大伴坂上郎女の柳の歌

(巻第八 一四三三番歌)

## うちのぼる佐保の川原の青柳は

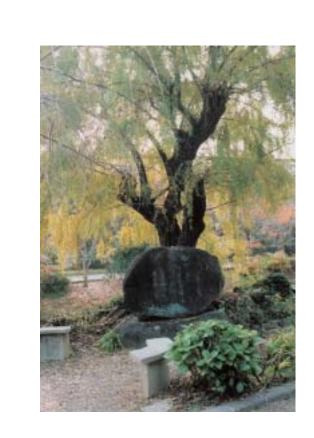
## 今は春べとなりにけるかも

そんな気がしていた。春は、待つもの。そして、満を持して突然訪れるもの。

の花びらが散りゆく中でひとり思った。ているらしい。その根拠は、必ずやって来る春にあるのかもしれないと、桜ん底が来れば、じっと耐えていれば、いつか上がる日が来ると本能に刻まれん底が来れば、じっと耐えていれば、いつか上がる日が来ると本能に刻まれが来た時などは、もうあがいても苦しんでも逃れようがない。平穏な日が訪が来た春が来た。夏も秋も冬もあまり「待つ」という気がしないが、心に冬

る。 ことなく溢れ出る。一つ前の一四三二番歌で、大伴坂上郎女はこう詠んでい 恋しい人が離れている時、病床に伏している時、身を案じる思いは尽きる

てくれるはず。冬は長い。果てがないように思われてくる。しかし、どんなえ見れば、元気なことが分かる。一枝から手に伝わる何かが自分を安心させ見るすべがほしいことよ。大切な人、案じている人が手折ったという青柳さあなたが見ておられるだろう佐保の青柳を、手折ったその枝だけでも、私は「わが背子が見らむ佐保道の青柳を手折りてだにも見むよしもがも」・・・



びを瑞々しく表現している。
おっかり春になったのだ。待ち望んでいた春になったのだ。そのよろこる。すっかり春になったのだ。待ち望んでいた春になったのだ。そして今、ませる。人はただじっと待っている。自然が予感を運んでくる。そして今、ませるとでは息はその訪れを感じ取る。殻を脱ぎ、芽を出し、蕾をふくらに寒くても花は鳥はその訪れを感じ取る。殻を脱ぎ、芽を出し、蕾をふくら

佐保川沿いの船橋緑地公園内にある。ている。また、写真の碑は、奈良市法蓮町にある佐保小学校の南側を流れる万葉集に載せられた歌も八十四首あり、家持に大きな影響を与えたと言われ叔母であるこの歌の作者大伴坂上郎女に育てられた。坂上郎女は才色兼備で、叔回でも記したとおり、大伴家持は、父である大伴旅人を亡くしてから、前回でも記したとおり、大伴家持は、父である大伴旅人を亡くしてから、

の下で元気な声を出していた。
おと見上げると、あたたかな日差しが降り注ぎ、川原では子どもたちが、柳柳は枝を切られても切られても、壮大な生命力で新しい芽を吹き出していく。いと別れ。ただそれは、必ず何かの始まりになる。次への大きな一歩になる。春は別れの季節でもある。春が運んでくるのは喜びばかりではない。出会

時は春。初めの一歩を、踏み出しましたか。」「だるまさんがころんだ。」